

カトリック 仙台教区報

No.251 2023年9月24日

発行: カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378
発行責任: 仙台教区広報委員会
URL <http://sendai.catholic.jp/>



2023年8月1日から6日まで開催されたワールドユースデーリスボン大会（ポルトガル）に仙台教区からも青年たちと司祭が参加し、世界各地の青年たちと出会う巡礼の旅を体験してきました。

出発に先立ち、元寺小路教会では7月23日年間第16主日のミサの中で、ガクタンエドガル司教により3人の若者／先崎まこさん（元寺小路教会）、石垣マイカさん（元寺小路教会）、河面雄樹さん（石巻教会）と、メヒア・ラファエル・タデオ神父（第3地区／宮城北部ブロック）のワールドユースデーリスボン大会への派遣式が行われました。



また野田町教会では芳賀光さんの派遣式が行われました。

日本の巡礼団は、ポルトガルのコインブラで大歓迎を受け、聖地ファティマをたずね、リスボンで教皇様の派遣ミサにあずかり、世界中の若者たちと交流を深めてきました。



ワールドユースデー(World Youth Day)とは？

ワールドユースデー(WYD)は、国連が1985年を「国際青年年」と定めたことを受け、前年1984年「あがないの特別聖年」の閉会ミサで、教皇ヨハネ・パウロ二世が、青年たちにローマへと集うように呼びかけたことにはじまります。その後、毎年「受難の主日(枝の主日)」が「世界青年の日」と定められ、2~3年ごとに世界各地でWYDの世界大会が開催されるようになりました。

※2020年より「世界青年の日」は「受難の主日」から「王であるキリストの祭日」に変更されました。

WYDは1985年のローマ大会から始まりましたが、日本の公式巡礼団としては2000年のローマ大会から参加しました。2019年のパナマ大会に続き今回のリスボン大会へは約100人が参加しました。次回は韓国で開催されます。

〈WYDリスボン大会2023に参加して〉

■石垣 マイカ（元寺小路教会）

ポルトガルでのワールドユースデー

羽田空港に到着し、16日間を一緒に過ごすことになる人たちの初めての顔を見ていると、日本の若者たちから、興奮とこれから始まるこのへの不安が入り混じった活気が発散されているのを感じた。日本からポルトガルまでの20時間以上のフライトで疲れ果てた私たちを、コインブラの人々はワールドユースデーのテーマソング "Ha Pressa no Ar"（直訳すると "Feel the Rush in the Air"）を歌いながら温かく迎えてくれた。世界中から集まつた若者たちは、テーマソングのリズムに合わせて歌い、踊った。



コインブラは、私たちのポルトガル滞在の興奮の始まりだった。すべての若者、司祭、地元の人々、修道者たちと知り合う方法がたくさんあった。絵を描いたり陶芸をしたり、町を探検したり、川まで2時間かけてハイキングしたり、楽しい終わりのない青少年フェスティバルに参加したりしながら、私たちはつながりを築き、絆を築いていった。見知らぬ人と友人になったりした。温かいハグとキスで私たちを心から歓迎してくれたホストファミリーは、私たちが家に入ると、おいしいポルトガル料理をテーブルに用意してくれた。私たちはお返しに、コインブラを発つ前に日本のお土産と大切にしていたロザリオ、そして心のこもった手紙を贈った。



ホストファミリーと

リスボンでの日々、私たちの絆はさらに深まった。十字架の道行き、前夜の祈り、そして教皇のミサに参加するために、何百万人もの若者たちと一緒に何時間も何時間も歩き、疲れた。

150万人の人々が、聖体がささげられるとき、静かにひざまずき、キリストを礼拝した。世界中から集まつた人々は、安全な帰国のために団結し、支え合つた。決して楽な旅ではなかつたが、これ

らすべてを目の当たりにしたこと、疲労と暑さに耐えたかいがあった。普遍教会を本当に体験した日だった。私たちはもはや他人ではなく、神への同じ信仰を共有する家族なのだ。

別れはつらかった。多くの素晴らしい人々に出会い、多くの楽しみや苦難を彼らとともに経験した。しかし、ひとつ確かなことは、私は世界中に友人を得たということだ。

次のワールドユースデーに多くの若者が参加することを祈っている。

■河面 雄樹（石巻教会）

無私

「愛に見える自己中心主義に気をつけてください。」パパ様がミサの中で投げかけた言葉が頭の中に残る。愛とエゴの違いは何なのだろうか。

私は街中でビッグイシューを売っているホームレスの方を見かけると、一冊買うようにしている。雑誌としてビッグイシューが面白いからという理由のみでなく、それが社会貢献になると思うからだ。しかし、ホームレスの方に雑誌代金500円を渡す度に、その行為は自分本位でしかないのではないかと考えさせられる。「他者を愛することをやめ、自分本位になるとき、あなたは輝きを失う。」パパ様、神様、では他者を愛するとは、自分本位とは何なのでしょうか。

その問いかけへの答えはまだ見つけられていない。ただ、この旅は私に多くの観点を与えてくれた。特に、この旅で感じた二つのことを共有したい。



私はこのポルトガル巡礼中にコロナウイルスにかかり、周りの数人とともに二日間教会で寝込んだ。高熱、頭痛、吐き気、咳、皆が諸症状に苦しんだ。その中には看護師として同伴していたシスターもいた。彼女は、自らが高熱にあえぐ中、自分の使用していたマットレスを他の人に差し出し、泣き言一つ口にせず、自分は寝袋一つで冷たい床の上で休んだのだ。特に印象的だったのは、シスターはそれをさも何でもないことかのように行っていたことだ。「あなたも行って同じようにしなさい。」イエス様の声が聞こえる。善きサマリア人の例え



ポルト空港にて左からラファエル神父様、私、先崎まこさん

でいう”私の隣人”とは、自分の置かれた状況に関係なく、目の前にいる人であることを実感させられる。

もう一つは、旅を通して常に感じたことだ。それは些細な振る舞いの中にある他者への思いやりだ。私がこのWYDを一番最初に感じたのは、バスから降り立った私たちに向けられたボランティアの人たちの演奏だった。次に WYDを感じたのは、見ず知らずの人に対して挨拶を投げかける違う国の見知らぬ人たちだった。これらは私や他者のことを深く考えて行われた振る舞いでは特にならないであろう。こうした方がちょっと面白そう、喜んでくれそう、その程度の小さなきっかけで行われた行為であろうと思う。それでも、私の心は少し軽く、温かくなったことをよく記憶している。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできることは何もない。(マタイ 17：20 新共同訳より一部抜粋。) からし種一粒の信仰の強さを思い知る。

「愛の行いをするときいつでも、あなたは光になる。」パパ様の説教が再び頭に響く。他者を愛する上で自分を離れる事は難しい。ただ、そのいくつの成功例をこの目を通して体感した。この旅は、何物にも変え難いと胸を張って言える経験になった。



ファティマで各国の青年達と

最後に、この旅で得た全ての出会いに感謝したい。特に、病気も砂まみれの野宿も共に乗り越えた友人たちへ。真の友は決して裏切りません。兄弟は苦しみに会ったときに助け合うためにいるのです。(箴言 17：17 リビングバイブル)

■先崎 まこ（元寺小路教会） 憧れの WYD に参加して



日本の巡礼団とともに

私がWYD(World Youth Day)と出会ったのは、中学校の廊下に掲示されたカトリック新聞的一面でした。喜びと活気に満ちあふれた世界各国の青年たち、彼らが教皇さまと共に祈る姿はとても印象的で、何か漠然とした憧れを感じたことをよく覚えています。それは次第に「WYDに行きたい!!」という強い希望に変わっていきました。思い返せば、青年会の活動に参加したきっかけも WYDと一緒に行く仲間を作るためでした。新型コロナ・ウイルスの影響で開催が1年延期になり、新卒での就職とWYDリスボン大会の参加、どちらを優先するのかすごく悩んだ時期もあります。「まず WYDに行ってきなさい。行きたい気持ちがあふれてるわよ。」というシスターの力強い言葉に押され、私は WYD の参加を選びました。

さて、ここでは私が WYD を通して感じた「喜び」をいくつか分かち合おうと思います。

1つ目は、WYD の参加をきっかけに両親がミサや教会に対して関心を示してくれたことです。私はカトリック信徒の家庭の出身ではありません。そのため、家で教会の話をする事はあっても、その反応に何か寂しさを感じていました。だからこそ、父親が派遣祝福式のミサに一緒にあずかってくれたこと、母親が WYD のミサや集いの配信を自ら見ててくれたことに大きな喜びを感じました。同時に、それぞれの方法で教会の青年活動を理解し、応援してくれたことに感謝しています。次は家族みんなでミサにあずかりたいです。

2つ目は、「教区での日々」を過ごしたコインブラという都市での出来事です。私はユースフェティバルというイベントで、岩手の水沢に祖父母の家があり、その土地の殉教者を大切に思っている現地の方に出会いました。彼女は私がお土産を持って行った広瀬川の殉教碑のポストカードを見て、感動するほどに喜んでくれました。殉教者の一人であるカルワリオ神父さまはポルトガルのコインブラの出身です。コインブラ大学で勉学に励み、



広瀬川殉教碑ポストカード 祖父母が岩手にいた現地の方と司祭に叙階され、のち宣教師として東北の人々に福音を述べ伝えました。来年2月で殉教から400年、彼らの情熱は現代にもしっかりと生きているのだなと思った出来事でした。

3つ目は、日本の教会で侍者などの典礼奉仕に日々励んでいる仲間に出会えたことです。

カテケージス後のミサで教会管区ごとに典礼奉仕をする機会がありました。初めて会ったメンバー・教会で司教さまが3人おられるミサでの侍者です。典礼に対する情熱があったからこそ、無事に奉仕することができたと思っています。同時に準備を通して典礼について、たくさん分かち合えたことが今後の励みです。

今回のWYDでは「喜び」だけでなく体調不良など「辛さ」もありました。ですが、帰国して本当にたくさんの方がお祈りしてくれていたことに改めて気づきました。教皇さまは、派遣ミサの最後に何度も「ありがとう」とおっしゃいました。私もお祈りやさまざまなお方法で応援してくださった方々にたくさんの「ありがとう」を伝えたいです。WYDへの道のりは「行きたい!」と思った時から始まっています。青年のみなさん、次はローマと韓国でお会いしましょう!かけがえのない体験が待っていますよ。

*2025年「若者の聖年」に合わせた行事がローマにて開催予定
*2027年WYDは韓国にて開催

■芳賀 光（野田町教会）

ご聖体における一致の恵み ～WYDに参加して気づいたこと～ Bom dia !



ポルトガルの友人と日本の友人、中央は私

思えば10年ぶりの海外旅行。10年前は上智大学神学部在学時代に、当時の哲学科教授 Fr.長町師の引率のもと、大学の同期に誘われて参加した。

あれから10年。海外に興味がなかったわけではないのですが、英語や外国語に強いコンプレックスがあつたし、経済的にも時間的にも余裕が全くなく、それどころではないというのが正直なところだった。

ここへきて巡礼旅行へ行く決意をしたのは、年明けに大学時代の友人から連絡があり、「ワールドユースデイに参加できるのは、今年がラストチャンス(30歳)！」との助言を受けて、「旅慣れした彼が段取りしてくれるなら安心」と思ったからだ。

予定ではリスボン空港で合流し、彼の誘導のもとでファティマに移動することになっていた。しかし行ってみると、彼の姿はなかった。彼の乗るはずのフライトがキャンセルされたとのことだった。



会場まで歩く人々

「はじめてのおつかい」の如く、そこから私の「初めての海外ひとり旅」が始まった。

ちなみに私の英語は英検4級レベル。ポルトガル語は全く勉強していない。そんな状況だったのだが、無事にバスに乗って、ファティマに移動し、宿のチェックインもバッチリだった。なぜか?みんな親切だからだ。言葉が通じなくても、一生懸命ジェスチャーとかで、どうにかこうにか教えてくれる。私も外国人に親切にしよう。そう思った。



リスボン大聖堂

信仰についても触れておこう。おそらく100万人以上のカトリック青年たちが、世界中から集まっていたので、さまざまな言語が飛び交っているが、そのことは全く問題にならない。

「チャーリングチャーリング」という音がすれば、「聖変化」が行われていることが一発で分かる。直前まで賑わっていた群衆が、聖変化が行われた瞬間、いっせいに静寂を守る。さまざまな言語を超えた一致の力が、ご聖体の神秘に収斂されていることを確信した。

言語の違いを超えていく神の働きに感謝。

聖母月を締めくくる 第16回シノドスのためのミサ

5月31日(水)聖母マリア訪問の祝日に世界中のすべての教区に、シノドスの働きを聖母マリアの保護の下に聖靈が豊かな息吹を与え、導いてくれるように心を一つに歩んでいくことが呼びかけられました。

仙台教区は、元寺小路教会で、この日「世界代表司教会議第16回通常総会に向けて聖母マリアとともに祈る」ミサが、ガクタン エドガル司教、イグナシオ・マルチネス神父、李錫神父、ヴァレラ・ミゲル神父、佐々木博神父、川崎忠紀神父によりささげられました。



ガクタン司教は説教の中で、「共に歩む」という意味を持つ「シノドス」と旅人のマリア様とを次のように話しました。

聖書の中で、たくさん歩いた1人は、マリア様です。いつも長い距離を歩いていたマリアの旅にヨセフと色々な人がいたのです。ナザレからエリサベスの居るユダヤの町まで約163キロメートルの距離(大船渡から仙台までの距離)があり、女性一人が歩く道のりではありません。ヨセフは旅行団体(キャラバン)を探し、その団体と一緒に彼とマリアが出かけたでしょう。6ヶ月後、ヨセフはマリアを迎えに行って、ナザレへの帰路もキャラバンと同行していました。それから半年後、マリアとヨセフは、登録のためベトレヘムへと向かいました。その距離約150キロメートルをまた団体と歩いていたでしょう。イエスが生まれるとエジプトまで約700キロメートルを旅することとなり、数年後、彼らは故郷へ戻りました。キャラバンと一緒にマリアとヨセフがあの道のりを歩いていたに違いありません。マリアとヨセフは、毎年過越の祭りためエルサレムに旅をしています。ナザレからは約145キロメートル離れています。イエスが12歳のときのエピソードがあります。過越祭の後、1日分の道のりを歩いてから、ヨセフとマリアは、イエスがキャラバンに居なかつたこ



とに気づき、二人はエルサレムへ戻りました。マリアとヨセフは息子イエスが神殿で長老と律法学者と話していたのを見つけました。マリアは息子の行動と言葉に驚きましたが、帰る途中これらのことすべて心の中に収めていたと書かれています。これは、自分が目撃したり、経験したり、驚いたりしたことを祈りの中で考えていたことでしょう。マリア様は心の中で、神様の力強い行いを思い返し、神様が本当に共に旅していることを確信し続けました。息子イエスが天に上げられた後、マリア様は弟子たちと共にイエスが示してくださった道を忠実に通り抜けました。共に歩む教会は、言わばキャラバンです。共に歩む中で、互いに励まし合ったり、賛美を捧げたり、祈ったり、目的を確認したり、助けあったりする同行者たちです。教会を導いてくださるのは、聖靈です。

ガクタン司教は、教皇フランシスコが、今年の聖靈降臨の祝日に行われた説教の結びをも紹介しました。「聖靈は『皆が集まる』ときに降臨するのがお好きです。そう、ご自分を世に現す



ために、皆が集まっている時と場所を選ばれたのです。神の民は、聖靈に満たされたために、『シノドスを行う』という旅を共にしなければなりません。聖靈を中心として共に旅をすることで、教会の調和は更新されますのです。」

共同祈願では、男性信徒、修道者、司祭、青年、外国人、女性信徒の代表が祈りを唱えました。

最後に、シノドスのための祈り Adsumus, Sancte Spiritus (聖靈よ、わたしたちはあなたの前に立っています) を全員で唱えました。

関 毅(教区広報委員)

東日本大震災支援活動12年を振り返って 〈カリタス南相馬〉

東日本大震災と福島第一原発事故から12年の月日がたちました。震災後から現在までの支援活動を振り返ってみると、その時々の地域のニーズに応じてさまざまな支援活動を継続してきました。全国の皆様からの祈りとご支援があつたからであり、心から感謝しております。

南相馬市小高区の復旧復興ボランティア活動が終了してからは、サロン活動や地域住民との交流イベントの開催、隣接するさゆり幼稚園の預かり保育の補助、サポートを必要としている大人と子ども支援、外国人支援、復興団地への戸別訪問など人と人との関わりの場を提供することに力を入れてきました。



カリタス南相馬で
行われている
「眞こころサロン」

また、原発事故による浜通りの状況をお伝えするために現地案内も随時行っています。廃炉資料館や東日本大震災・原子力災害伝承館など、津波や原発事故当時の状況、廃炉事業など展示物や住民の証言などによりさまざまな角度から知る施設があり、福島における課題を考える良い機会になっていると感じています。この夏には7団体の高校、大学生がカリタス南相馬を訪れました。現地を見て、聞いて、考える場を提供できることをうれしく思います。

20km圏内の南相馬市小高区は、避難指示が出てからいったん人口はゼロとなりました。2016年に居住制限が解除され、ゼロからの出発となり、「新しい創造」への第一歩を踏み出したとも言えます。しかし、現実を見てみると、帰還した住民は約3割、その半数以上は高齢世帯という状況の中、新たなコミュニティ再生や支援が必要となっています。

震災後、さまざまな修道会のシスター方がこの原発被災地における支援の必要性を感じて生活を共にして活動してください、とても大きな力となっています。また、小高伝道所の牧師さんや同慶寺の住職さんと共に、合同慰靈祭や地域イベントを行うこともあります。

仙台教区では、平賀司教が打ち出した「新しい創造基本計画」を実践していく中で、さまざまな形で「新しい創造」を経験したはずです。今、もう一度この11年間を振り返りながら、「新しい創造」とは何かと考えることは十分に意味がある事と考えます。仙台教区広報委員会では、皆様方が感じたそれぞれの「新しい創造」についての投稿を募集いたします。

それぞれの
新しい創造
原稿募集

宗教の壁を越えて、人と人とをつなぐための大切な取り組みが行われているところにも「新しい創造」を感じます。

ある方が「カリタスの場所があったおかげで全国のボランティアの方と知り合うことができ、心の支えにもなっている」と話されました。また、昨年の福島県沖地震の際には「カリタスという拠点があったから、すぐに災害支援に入ることができた。」と感謝の言葉を頂きました。そして今年7月、大雨災害が甚大だった秋田の聖霊高校のボランティア活動に、夏休みを利用してカリタス南相馬に来る予定だった東星学園の高校生ボランティアと共に急きょ活動に入ることができました。同じ世代の高校生が通う高校の被害状況をじかに見て共に復旧活動を行えたことは貴重な体験になったことだと思います。



秋田の大雨災害で被害
のあった聖霊修道院。
地下に入った泥水と
オイルの混じった
家具類を解体して
外に運ぶ作業。

カリタス南相馬は、ボランティアベースとしての機能はもちろんのこと、被災地の声を届けることにより現状をお伝えしていくこと、そして人ととのつながり作りのお手伝いをすることを大切に考えています。

原発事故により家族や地域のコミュニティが揺らいでしまったこの地域だからこそ、人ととのつながりを築いていくことが「新しい創造」への第一歩だと感じています。

そして、福島で起きたこと、ここでの教訓を生かし、未来につないでいくことも「新しい創造」への歩みであると感じています。

喜びも辛さも共に感じながら、この地に「共に生きる」ことによって私たちにできることを今後も果たしていきたいと思っています。そこに神様のみわざである「新しい創造」がなされると信じて……

*カリタス南相馬では、現在常勤スタッフを募集中です。
お力を貸していただける方は、ぜひお知らせください。

一般社団法人力リタス南相馬
所長 南原 摩利

カトリック中央協議会「復興支援室」

緊急対応支援チーム

「ERTS(Emergency Response Support Team)」

2021年の春、東日本大震災の復興支援活動を経験した方たちが、全国各地からカリタスジャパンの呼びかけによってオンラインで集まりました。今後起こりうる災害に備えて中央協議会に復興支援室を常設し、その傘下に緊急対応支援チーム「ERTS (Emergency Response Support Team)」を置く、というお話しでした。まずはオンラインでそれぞれの体験を分かち合い、メンバー同士の横のつながりを深めていきました。また発災時には迅速にかつ柔軟に動けるように災害対応の規定や細則などを確認し合いました。そして2022年2月、日本の司教団はカトリック中央協議会に復興支援室を常設する事を決定し、2022年3月、緊急対応支援チーム「ERTS」が発足しました。中央協に災害対応に特化した専門部署が設立されたという事で、今後はカリタスジャパンや関係部署と協働し組織的な支援活動を行っていく事が可能になりました。現在 ERTSメンバーは7名で構成されています。災害発生時に被災教区からの要請により現地に派遣され、災害対応が軌道に乗るまでの間、被災教区が主体となった支援体制構築のため、教区現地スタッフのサポートを行います。



被災教区での支援体制構築のため、短期的に(最長3ヶ月)投入されるチームです。大規模災害の時は被災教区の要請により延長も考えられます。

具体的な ERTS の役割は以下になります。

- ① 被災状況の調査 (災害の規模にかかわらず、教区からの要請で ERTS を派遣できる)
- ② 被災教区の現状に合った支援活動の提案～構築 (災害対策本部やボランティア拠点の立ち上げなど)
- ③ 情報発信 (物資、募金、ボランティア受け入れなど)



仙台教区の方々はすでに経験されている事もあるかと思いますが、発災時に被災者が支援者になるということは、その人に大きな負担を強いることになります。そこを軽減できるように被災された教区の方々が本来の業務に従事できるようにサポートしていきます。

また災害時には必要のない物資がたくさん送られてきた経験がある方も多いのではないでしょうか?錯綜するさまざまな情報を精査し教区からの情報を一本化し、復興支援室にERTSが正確な情報を伝える事で刻々と変わる被災地のニーズにあった物資の呼びかけを全国の教会にも発信することができます。

ERTS撤退後も被災教区の要請に応じて、必要なフォローアップを行います。大変な状況だからこそ共に歩み、乗り越えていけるように心を尽くしていきたいと思います。

平時には防災研修の一環として、2022年10月に中央協議会の関係部署の方々との会合が始まり、実際に大規模災害が起きた場合に中央協議会として各部署が連携し、後方支援にあたれるよう話し合いを重ねています。2023年6月には広島教区で初めてERTSが出向き災害対応ワークショップが開催されました。参加された教区の皆さんのは自分事として真剣に捉えられているようでした。そしてこの原稿を書いている7月末、秋田の大震災の緊急対応支援のため、ERTSに派遣要請が新潟教区から入りました。まだ全容は明らかになっていませんが、被災された地域の方々が少しでも負担軽減となり、支援活動がスムーズに進んでいけるように協力していければと願っています。

一般社団法人力リタス南三陸
千葉 道生

仙台教区のうごき

【司祭評議会報告】

仙台教区司祭評議会は、ガクタン エドガル司教の司教叙階1周年が過ぎた4月11日(火)に、司教を中心に10人の評議員が集まり、第1回目の司祭評議会が開催された。

「聖靈を求めて」というシノドスの祈りを全員で唱えた後、まず、「仙台教区司祭評議会規則」を各章ごとに輪読することから始まった。この規則に沿って司祭評議会が運営されていくことを確認した上、評議会の役員2人の選出が行われた。

その結果、渝鍾弼(ゆ ちよんぴる)神父と佐藤修神父に決まった。

また、世界の教会のシノドスと仙台教区のシノドスの架け橋を作つてほしいという意向で、評議員の中から、教区シノドス担当者として「仙台教区シノドスチーム」の名称で、幸田和生司教、李錫(いそく)神父、イグナシオ・マルティネス神父の3人が任命された。

さっそく、バチカンのシノドス委員会からの要請によって、中央協議会から、5月31日の聖母の訪問の祝日に、シノドスのために祈るように決められた文章が届いたが、間近に迫っていたので、シノドスチーム司祭たちの話し合いで、5月31日(水)午後6時から元寺小路教会でミサがささげられることになった。

第2回目の仙台教区司祭評議会は、6月6日(火)に開催され、報告として、「未成年と弱い立場に置かれている成人の保護のためのガイドライン」の説明がされた。今後、このガイドラインに沿つて、全ての司祭に未成年者と弱い立場にある成人の保

護と擁護をしなければならないことがはっきり示された。

その後、まず地区の地区長司祭による地区的発表がされた。

次いで、「交わり、参加、宣教」についてのアジア地区でのシノドスの文書の報告がされた。

元「聖パウロ書院」の建物の利用について話された。2階部分は外国人司牧のために、ギャリー神父が責任をもち、1階部分は、元寺小路教会が教会案内所とすることが話された。

第3回は、7月11日(火)に開催された。各地区長の現状報告の後、「子どもと女性の権利を守る委員会」について、現在の委員たちが「ハラスメント防止宣言」を準備していることが報告された。

議題の中心は、教区における外国人司牧対応についてであった。「仙台教区における多様性に満ちた神の国」という方向性のビジョンということで、話されたが、各地区の地区長は、それぞれの国の人々の司牧、その子どもたちの教育問題、家庭での信仰教育に心を砕いており、種々の議論が出たが、簡単に結論ができるものではなく、継続審議となった。

「宣教司牧評議会規則」の改正案についても話された。また、シノダルチャーチとなることをを目指して歩み続けている司祭評議会の歩みもさらに前向きに進んでいる。

2023年7月20日

仙台教区事務局 事務局長
イグナシオ・マルティネス

新「ローマ・ミサ典礼書」によるミサ実施に向けて〈その4〉

奉納祈願への招きと叙唱前句

「新しいミサ式次第」が実施されて半年が過ぎました。まだまだお手元に式次第を持ちながらミサと共に捧げておられると思います。お気づきのとおり、奉納祈願への招き（「皆さん、ともにささげるこのいにえを、全能の父である神が受け入れてくださるように祈りましょう」）の後に、「神の栄光と賛美のため、またわたしたちと全教会のために、あなたの手を通しておささげするいにえを、神が受け入れてくださいますように。」を唱えるようになっています。その後、しばらく沈黙のうちに祈ることが勧められています。

奉納祈願が終わると、奉獻文の叙唱前句を唱えますが、これは大きく変わった箇所の一つとなり

ます。以前は、二段階の対話句でしたが、ラテン語規範版に忠実に翻訳した結果、三段階の対話句へと変更されました。これは、他の言語でも三段階の対話句に翻訳されていて、世界中の信徒が集う日本の教会でも、彼らが違和感を覚えることがないように、それにあわせたものです。

「それはどうとい大切な務めです。」と会衆は唱えますが、ラテン語規範版では、この言葉を受けて、「まことにとうとい大切な務めです。…」と司祭は叙唱を唱えていきます。日本語の翻訳の関係で、そのつながりがはっきりしませんが、会衆と共に司祭がミサを捧げることがここに示されています。

仙台教区典礼担当 森田 直樹 神父

各地区からのお便り

第1地区より

〈青森・下北ブロック／本町教会・浪打教会〉 高木健太郎神父様の初ミサ

7月23日(日)午前9時から、爽やかな夏の潮風とねぶたばやしの青森市の本町教会において、高木健太郎神父様の初ミサ（浪打教会との合同ミサ）が執り行われました。当日は、たくさんの方が参列され、聖堂はあふれんばかりの満杯でした。いかに待ち望んでいたか、私たちの喜びが神父様にも伝わったことと存じます。



高木神父様は柔軟で謙遜、はにかんだような優しいほほ笑みをたたえられ、明るく和やかな雰囲気のうちに、ミサが肃々と進みました。第一朗読は知恵の書12:13、16-19第二朗読はローマの信徒への手紙 8:26-27、そして福音はマタイ13:24-43、毒麦のたとえ、からし種とパン種のたとえ。暑い中、神父様は長い福音を朗読されました。説教の中で心に残ったのは、「成長」というのは「良い麦」だけでなく「悪い麦」についても同じように赦されている、実社会を見ると、神様は「悪い麦」についても見守っておられる、神様はすべての人を平等に愛してくださる。私たちが回心するのをいつまでも待っていてくださっている。この福音も、神様の大きな広く深いあわれみ（「はらわたする」（スランクニゾマイ）=愛）を示しておられる、ということです。しかも、神父様は、あわせて、御自身の召命の道のり、信仰体験を具体的にわかりやすく話し、叙階までのいろいろな不思議な出来事があったけれども、全体として「全くつじつまが合わないんです、理屈で説明できないんです」とふりかえっておられ、そうした召命のご体験から、むしろ、叙階カードの「わたしについてきなさい」（マルコ1:17）というみ言葉（主の招き）とそれに応えたことの神秘（秘跡）を目の当たりにさせていただいた思いで、聖霊の働きは本当にものすごいものだと感動をいただきました。



ミサの後も、喫茶で高木神父様との分かち合いの感動は続きます。神父様は大人気。皆に囲まれ、いつも笑顔で、ひとつひとつ、わかりやすく丁寧に優しく、実体験をそのままにお話しになり、こうした交わりを通じて聖霊とともに皆がひとつに包まれていると感じました。

高木神父様、これからも仙台教区のため、また、全世界の普遍教会のために、どうぞ元気で力いっぱい頑張ってくださいますように。

祈りのうちにこのような初ミサを企画いただいた李錫神父様をはじめ、準備と運営の重荷をいつも快く担ってくださる本町教会・浪打教会ほか関係の皆様方へ、心から敬意と感謝を申しあげます。

松田 大（浪打教会）

〈三八ブロック〉 三八ブロックに新しい風 洗礼式と初聖体式の喜び

今年の復活祭に、八戸塩町教会では5人（男性2人、女性3人）の方々が、鮫町教会では2人の方々が洗礼のお恵みをいただき、十和田教会では1人の幼児洗礼が行われました。



また、復活祭の次の日曜日には塩町教会で4人の子どもたち（小2、小3、中1、中2の男子）と三沢教会でも4人の小学生の子どもたちが勉強会を経て、初聖体の恵みをいただきました。

ようやくコロナ禍も下火になり、昨年から神父様の入門講座が開始され受講された方々の喜



びの洗礼式となつたのでした。この喜びが次に続くことを願い、今年度も新たな入門講座を6月から開始しています。

Sr.小川 敦子(聖ウルスラ修道会塩町修道院)

〈三八ブロック／久慈教会〉

カトリック久慈教会は1953年11月23日に、久慈地域の福音宣教の場として、献堂され、今年で70周年を迎えます。

久慈市は岩手県の北部に位置し、南は宮古市、北は八戸市（青森県）との中間にある人口3万4千人の漁業と商業の太平洋に面した「琥珀と北限の海女」の町です。

久慈教会は、1953年から2014年までベツレヘム外国宣教会によって初代アントニオ・ブラウン、2代目ルカ、3代目ガイッセル、4代目カロロ・トマ神父と続けてきましたが、2012年トマ司祭が帰国後は、八戸塩町教会から佐藤修神父が派遣され、毎週来てくださいました。

2020年佐藤神父が転出、その後は邦人司祭が少なくなり現在はフィリピン、インドネシア、メキシコ、コンゴと淳心会の司祭のもとに、楽しくごミサにあずかることができ、感謝しております。



仙台教区の新地区制度により、第1地区青森県に編入され、2023年5月から新しい第1地区三八ブロックとして再スタートしたところです。

2016年8月30日、台風10号が初めて岩手県を直撃し、大洪水になり、教会と幼稚園が床上1mの浸水を受け、床がはがれ、泥が30cm積もり、天井以外はほとんど損傷を受けました。ただ一つ残ったものは、祭壇だけでした。

教会の復元、改装はどうしようと悩んでいましたが、仙台教区はじめ皆さんのご支援とお祈りによりまして、ようやく再開できました。

本当にありがとうございました。心から感謝申しあげます。なお、幼稚園は解体いたしました。

毎週、10人前後の教会ですが、最近はフィリピン、ベトナムの姉妹たちが来るようになり、クリスマス、ご復活には40人になります。毎週ごミサ後は司祭と一緒にコーヒーを飲みながら懇談しています。

今回、幼稚園の跡地を病院の駐車場に貸すことになり、これを機に念願だった玄関ドア、入口の階段の整備、スロープの取り付けをしております。教会入口を明るくし、高齢者や障がい者をやさしい笑顔で迎え入れる教会にしたいと思っております。

結びに、今日までお世話になりました多くの司祭、教会の皆さんに心から感謝申しあげます。

中野 信男（久慈教会）

第4地区より

元寺小路教会で5人の堅信式行われる

教会の誕生日ともいわれる5月28日、「聖靈降臨の大祝日」に、第4地区では、元寺小路教会において、ガクタンエドガル司教の司式で、元寺小路教会から朴叡彬（ぱくいえびん）さん、石川真誉さん、平間百合子さんの3人、東仙台教会から千葉龍聖さん、八木山教会から二瓶玲音さんの5人が堅信の秘跡を受けました。この日は、聖靈降臨で、莊厳に聖靈の続唱も歌われ、福音朗読の後、ガクタン司教の説教のまとめは次のとおりです。



「ルーアハ」、「ルーアハ」、「ルーアハ」。同じようにゆっくり「ルーアハ」と繰り返し発声してください。気づいたでしょうが、この言葉を繰り返し発声すると、実際、息を吸ったり、止めたり、吐いたりします。

旧約聖書では「靈」にあたるこのヘブライ語の「ルーアハ」は、神の「息」あるいは「風」を意味し、人間の生命原理とみなされています。言い換えると、ルーアハ、と言うだけで、言葉の意味を実感するのです。それは、息そのものです。

イエス・キリストが十字架にかかる死へ亡くなられました。弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、部屋の戸を閉め、みんなで固まっていました。3日目にイエスが復活されたということも信じられず、ただ一部屋に閉じこもっていました。その、ど真ん中に、イエスが現れたのです。そして、こう語りました。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言されました。「聖靈を受けなさい。あなたがたに平和」と言って！この瞬間、弟子たちは生き返りました。神の息によって弟子たちは閉じこもっていた部屋から出ました。

第一朗読のお話は、福音の話の七週間の後のお話ですが、五旬祭の日いろいろな国に住んでいるユダヤ人たちが、「この日には、エルサレムに行こう」とたくさん的人が集まっていました。このお祭りに参加するため弟子たちも集まっていました。「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖靈に満たされ、“靈”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。」

弟子たちはほとんどガリラヤの人でした。ガリラヤの人はなまりが強いようで、一言話せば、すぐガリラヤの人と分かるくらいでした。しかし、不思議なことにペトロや他の弟子たちの話を聞いても、この日には、なまりのことは、言われませんでした。「話をしているこの人たちは、皆、ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれ故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、バルティア、メディア、エラムから来た者がおり……」と言われました。風が炎のような舌として現れました。風のもたらした結果は、理解そのものです。この息がもたらした実は、真理を話せることとその真理を理解することができるのです。

私は、今、私の母国語じゃない日本語で話をしていますが、日常の会話の中でも、このような説教の中でも、なかなか言い表せないことがあります。ある時は、私の話を聞いた人から「ど

こで、日本語をお覚えになったのですか」と言われたこともあります。褒め言葉のように聞くこの言葉は、実際導入の言葉で、その次聞かれることは、私が述べたことの意味の確認です。

私たちでも、聞こうとしなければ意味が通じないことがありますね。家庭の中でも、息子が「お父さんの言っていることが分からない」ということもあります。しかし、ある時、「ああ、お父さんが言っていたのは、これだった」と分かるときがあります。当事者たちのやり取りによって理解が得られるのです。

これから、5人は堅信の秘跡を受けます。これまで、神の子どもとなる洗礼の秘跡を受けました。今日は、聖靈の息吹を受けます。兄弟たちを励ますため、共同体のだれかに仕えるために、イエスはあなた方に息吹をかけて立ち上がりさせてくださいます。

聖パウロによると、聖靈の結ぶ実は「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔軟、節制」です。これまで、この聖靈の実りを、私たちは、だれかから分かち合ってもらっていました。今度は、皆さん、その恵みを他の人にわかつあうのです。さんは、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔軟、節制の人になり、同じ実を分かち合う者になります。



堅信の儀は、まず、受堅者の紹介から始まりました。名前を呼ばれた5人は、代父母に伴われ、祭壇の前に進み出て、洗礼の約束を更新しました。司教の信仰宣言の言葉に「はい、信じます」と答えました。この宣言を聞いた司教は、「これこそ私たちの信仰。主イエス・キリストにおいて、誇りをもって宣言する教会の信仰。」と司教が、彼らの堅い信仰を受け止めた言葉に、「アーメン」と力強く同意しました。

こうして堅信の秘跡の中心部に入りました。

司教が、大勢の参列者に「神の子どもとなつたこの人々の上に、全能の神である父が聖靈を送つてその信仰を強め、おん子キリストの姿にあやかる者としてくださるよう祈りましょう」

と祈りに招きます。次いで、一人一人の上に按手をし、「今、この人々の上に助け主である聖靈を送り、知恵と理解、判断と勇気、神を知る恵み、神を愛し、敬う心をお与えください」という祈りを唱えながら、頭に手を置く按手をしました。

続いて、一人一人の額に聖香油を塗り、堅信名と名前を呼ばれ、「父のたまものである聖靈のしるしを受けなさい」と宣言し、5人とも「主の平和」と答え、共同祈願が唱えられ、ミサが続けられました。

聖体拝領後、最後に司教の莊厳な祝福を受けた後、元寺小路教会から、一人ずつにお祝いの花束が贈られ、盛大な拍手を受け、受堅者の顔も輝いていました。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

〈カテドラルブロック〉 仙塩地区教会学校合同サマーデイキャンプ

午前中、小学生は「神さまがつくられた世界」が今どんな状況かを知り、地球温暖化や格差についてワークショップをしました。自分たちが今できることを考え、CO₂を減らし、食糧が足りないところには分け合いたいなど、たくさんのお祈りが出され、頼もしい子どもたちでした。中高生は「私たち中高生が実現できる平和とは」というテーマのもと、歴史・国際情勢・平和学などを踏まえて、自分たちにできる平和への行動について話し合いました。午後は、元



寺小路教会の中を巡るスタンプラリーを行いました。普段触ることのできないオルガンを演奏してみたり、入ることのできない教区事務所を見学したり、貴重な経験をたくさんすることができました。キャンプの最後は、ミサで締めくくりました。侍者や朗読、共同祈願など、キャンプに参加した子どもたちがミサ中の奉仕を務め、みんなで作り上げた温かいミサとなりました。

熊谷 凜（一本杉教会）

〈カテドラルブロック／元寺小路教会〉 聖パウロ館／St.Paul House オープン

昨年末で閉店した聖パウロ書院の建物を、ふれあいのスペースとして活用する事になりました。1階は元寺小路教会の勉強会やおやすみどころとして、2階は教区の移住者司牧事務室として使用され、聖パウロ館と名付けられました。



聖母の被昇天の8月15日10時のミサの後、信徒が大聖堂前の広場に集まり、ガクタン エドガル司教による祝福式が行われ、祈りと聖歌を歌い祝いました。



また、かねてより要望が多かった、聖パウロ書院に代わる聖具・聖品の販売を元寺小路教会宣教広報部で行う事になりました。第4日曜日を除く毎日曜日9時のミサ後1時間程度ですが、信徒ホールで開店します。ぜひご利用ください。

関 毅（教区広報委員）

第5地区より

〈中通り北ブロック／野田町教会〉 高木健太郎 新司祭 初ミサ



5月7日(日)、野田町教会での合同ミサで高木神父様の初ミサがありました。4月29日(土)



に司祭に叙階されて一週間、若い神父様のとても落ち着いたミサでした。ミサの後はささやかなお祝い会を催し、高木神父様からはたくさんの楽しいエピソードや8月からフィリピン留学についての思いなど、お話くださいました。

(月刊ぱんだね 6月号より)

〈中通り北ブロック／松木町教会〉 高木神父様 初ミサと分かち合い



7月9日(日)、高木神父が松木町教会での初ミサを行いました。



ミサ後の分かち合いには、約60人が参加し、マイクを回しながら全員が一言ずつ、神父様に質問したり、今後に向けてメッセージをお伝えしました。(月刊アンジェルス8月号より)

〈中通り北ブロック／ 野田町教会・松木町教会 合同開催〉 福島市でカトリック教会「夏の集い」を開催

7月17日(月)海の日に、福島市のカトリック教会「夏の集い」を行いました。



今年は、梁川の技能実習生を含めて50人の参加でした。とても暑い日でしたが、エメ神父様の若い時代の話、ミサ、ゲーム、カレーライスの昼食、スイカたたき、ピンポン大会と楽しい一日でした。(月刊アンジェルス8月号より)

〈中通り南ブロック／郡山教会〉

聖霊降臨の祭日

マリア様にささげる歌と踊り



5月28日、郡山教会では聖霊降臨のお祝いをいたしました。ミサの前にベトナムの信徒さんたちお一人お一人が一輪のお花を持ってマリア様にささげる踊りを披露しました。踊りの最後に一人ずつ祭壇にお花をささげました。つづいてザベリオ学園小学校の聖歌隊の子どもたちも一人ずつお花をささげました。



ミサの中では奉納の歌はフィリピンの信徒さんが、拝領の歌はザベリオ学園小学校聖歌隊の皆さんのがうたいました。閉祭にはギターの伴奏で『アーメンハレルヤ』を全員で歌いました。150人を超える出席者があり、聖堂に歓喜の歌声が響き渡りました。 小湊 博子(郡山教会)

教区の諸活動

仙台教区ベトナム人青年コミュニティ マリア祭



アヴェ・アヴェ・アヴェ・マリア

5月は聖母マリアの月です。ベトナムの教会ではこの月にマリア様への崇敬を表すために、お花をささげる伝統が長年保たれています。日本ではお祭りの時、神輿(みこし)をかつぐ習慣があるように、ベトナムのカトリックでも、毎年のマリア祭にマリア様の御像の周りに新鮮な花を綺麗にいっぱい飾って教会の周りを担いで行列することが行われています。



5月21日、主の昇天の祭日に、私たちはマリア祭を厳かに行い、花をたくさん手にして行列しました。さらにガクタン エドガル司教様が東京教区のベトナム人司祭グエン・フウ・ヒエン神父様と共に行列し、マリア祭に参加され、御ミサをささげてくださいました。私たちは、このことを誇りと思っています。

そしてベトナムの青年のために洗礼式と堅信式を行っていただきました、志願者にとってはもうれしく何よりも幸せなことです。神様から素晴らしい贈り物を頂きました。

さらに、この厳かなマリア祭を通して日本の教会共同体の皆さんとの温かい心遣いを深く感じることができました。



この行列に参加した若者たちはこの共同体の中から愛を広げ、希望をよみがえらせ、信仰を保つために、母国を離れても手をつないでカトリック信仰を生きようとしています。また、行列にさまざまな国籍の方々と一緒に、綺麗な花を持って共にマリア様にささげながら「アヴェ・アヴェ・アヴェマリア」と声高らかに歌うことによって、この行列が最も厳かになったことは、言葉で表すことのできない喜びです。

神様のお恵みを心に留めながら、ガクタンエドガル司教様をはじめ、グエン・フウ・ヒエン神父様と多くの皆さんと共にこのような思いのあるマリア祭ができて、本当に心から感謝いたします。これから歩みも共にできたらと思います。よろしくお願いいたします。

ベトナム人青年コミュニティ担当
Sr. マイ (善き牧者の愛徳聖母修道会)

平和を求める、キリスト教各派の信徒集まる

仙台キリスト教連合主催の「平和を祈るキリスト者 合同祈祷集会」が、平和旬間中の8月13日、カトリック元寺小路教会で開催され、600人余が集まりました。

今回は、講師としてガクタン エドガル司教が招かれ、特別賛美として、椎名雄一郎・東北学院大学教授によるパイプオルガン演奏がありました。

ガクタン司教は、諸宗教会派の方々とご一緒に、平和のために祈る祈祷集会が行われることはうれしいことです。今日は、「新しい創造」についてお話ししたいと思います。キリストが抱いたと同じ思いを抱き、一層新しい創造の道を歩みたいと皆を祈りにさそいました。

1982年、ヨハネ・パウロ2世教皇が平和の使者として日本を訪問した時、広島で世界に向けて「平和アピール」を発表されました。その中で「過去を振り返ることは、現在の責任を担うことです」とおっしゃっています。私たちは、広島、長崎を忘ることはありません。それで、日本のカトリック教会は、8月6日～15日までを「平和旬間」と決めました。

今年、私は、8月6日に広島の平和記念聖堂で午前中を過ごし、午後、原爆の体験を語つておられる何人かの語り部の話を聞きました。



「戦争は、人間の仕業です。戦争は、人間の生命の破壊です。戦争は、人間の死です」。この言葉を教皇ヨハネ・パウロ2世が残していかれました。イエスの正義は、復讐ではありません。神である主イエスは弱くもろい人間になられました。この私たちの礼拝は、平和のしるしとしてでも意味があります。イエスは、今日、私たちと共におられ、目立つことなく、音もたてず、このように、私たちに愛を示してくださいます。その愛によって、訪れている小さな平和、私たちの小さな会話を感謝いたしましょう。

平和によって新しい創造がしづかに築かれていくように、その後、パイプオルガンが、心の平和を表すように静かに、ある時は力強く、聖堂内に響き渡りました。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

カトリック正義と平和仙台協議会 平和旬間ミサ・講演会 —平和への思いを共に— ～私たちが共に歩む教会で 足もとから始める平和への道～

日本カトリック平和旬間が始まる8月6日の変容の祝日に、元寺小路教会では9時のミサを平和を求める意向ミサとしてささげられました。この後引き続きイグナシオ・マルティネス神父による講演会が行われました。



イグナシオ神父は、神学生時代に地域の方と一緒に祈り労働を共にした事や、2016年から

カトリック中央協議会の社会福音化推進部で働き、カトリック教会の社会的責任と共通理解を深める仕事をされてこられました。

これらの経験から、社会を見る目と福音的な目を身につける事。「平和の輪、平和への道」は自分たちの心から始まる事。祈り、学び、活動する事を基本に、考える事。そして、共に歩む家族、共に祈り、学び行動する教会であり、共に社会の福音化を実現する教会となるように歩んで行きたいと締めくくられました。

最後に全員で核兵器のない世界の実現のための祈りを唱え終了しました。

関 毅（教区広報委員）

■ 特別寄稿 ■



以前、仙台教区で宣教司牧をされ、高木健太郎神父様の叙階式にも共同司式された、東京カトリック神学院のマルコ・アントニオ・マルティネス神父様から投稿していただきました。

カトリック仙台教区と私

私と仙台教区との関係は55年の歴史があります。1968年9月10日に来日しました。当時28歳。グアダルペ宣教会から神学生として派遣されました。時差ぼけが治らないままでしたが、日本語の勉強を頑張りました。日本に来て初めての冬休みは、福島県の喜多方教会で過ごしました。その時、会津若松教会にはグアダルペ宣教会の神父が3人いました。喜多方教会にはホセ・モンロイ神父しかいなかつたで、私が派遣されました。大雪に囲まれて、零下23度、畳三畳の部屋でメキシコの太陽の国から来た宣教者として、初めて雪国の冬を体験しました。

2年間、六本木の日本語学校で日本語を勉強した後、東京カトリック神学院に入学しました。日本人の36人の神学生と一緒に住むこと、神学を勉強することが認められました。私が抱えていた問題の一つは、日本語学校で学んだ日本語が、広島、関西、京都、東北から来た神学生の話していた日本語（方言）と違うということでした。しかし皆が私に分かるように話してくれました。

その時、仙台教区の神学生は、平賀徹夫、渡辺彰広、首藤正義と笹氣直哉。グアダルペ宣教会は、当時会津若松に本部がありましたので、仙台教区のグループとして、この4人と、もつ

と仲良くしました。神学院で祝賀会やパーティーが開かれると、出し物で、各教区の神学生たちはカラオケのない時代だったので、各教区のその地域の伝統的な歌を歌いました。仙台教区のグループでは会津磐梯山の民謡を楽しく歌いました： ム♪♪♪♪ エーイナー会津磐梯山は宝の山よ 箕に黄金が エーマタなりさがる（チヨイサー・チヨイサー）ム♪♪♪♪ 私は全く音痴なので、歌をここまでしか歌えませんでした。でも、私が得意なセリフありました：“おはら庄助さん何で身上つぶした 朝寝、朝酒、朝湯が大好きで、それで身上つぶした、ハア♪モットモダ、モットモダ” 今でも覚えています。

司祭に叙階された後、さまざまな福島県の教会で福音宣教活動を行いました。喜多方、会津若松、白河と、須賀川。私の青春時代の教会でした。特に須賀川教会は長く福音宣教に関わり、福島大学ではスペイン語を教え、教会では高校生たちとの活動が本当に楽しかったです。その後、京都教区と東京大司教区に派遣されましたが、仙台教区で行った福音宣教活動は、決して忘れていません。

今は靈的同伴として東京カトリック神学院にいます。83歳の私に、神学生の時から司祭叙階まで高木神父様に同行することを慈しみ深い御父である神様が、恵みとして与えてくださいました。

仙台教区との関係が、いつまでも心に残っています。

全て神に感謝。

東京カトリック神学院 養成担当協力司祭
マルコ・アントニオ・マルティネス

訃 報



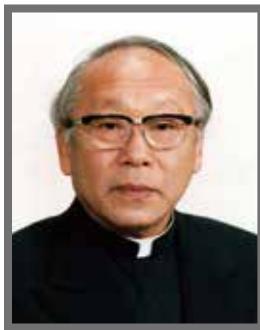
Sr. マリア・クララ・デュ・サクレクール
吉田 稔子（よしだとしこ）帰天
(ドミニコ会 ロザリオの聖母修道院)

〈略歴〉

1928年 9月1日生まれ
1961年 10月16日 初誓願
2023年 5月23日 帰天 94歳



ミカエル 鷹觜 達衛(たかのはし たつえい) 神父 帰天



〈略歴〉

1928年 4月12日 盛岡生まれ
1956年 12月22日 ローマにて司祭叙階
1958年～以下の教会、幼稚園において宣教司牧に従事する
北五十人町教会(現仙台西教会)、大河原教会、畠屋丁教会、亘理教会、元寺小路教会、
駄町教会、五戸教会、塩釜教会、一関教会、千厩教会、大湊教会
ファチマ幼稚園、五戸力トリック幼稚園、塩釜力トリック幼稚園、塩釜力トリック幼稚園、
愛心幼稚園、力トリック清心幼稚園、大湊力トリック幼稚園 各園長
1998年～司教総代理、教区管理者
2000年～司教総代理、光ヶ丘スペルマン病院理事長(～2016年)
2004年 引退(司祭の家)
2023年 6月14日 帰天 95歳

6月14日(水)午後、鷹觜神父の訃報が伝えられ、それを聞いた人は皆驚きました。病院に入院され、弱って来られたという話は聞いていたのですが、4月29日の高木健太郎神父の叙階式の時に車いすではありましたが、お元気そうなお声とお顔の様子からは、とても想像できないことでした。

6月16日(金)午後6時から司教座聖堂で通夜が、翌17日午前11時からは、同じく司教座聖堂で葬儀ミサが行われました。どちらもガクタンエドガル司教の司式で行われました。通夜は雨の中にもかかわらず、約100人が参列し、葬儀の日は青空の中を150人の信徒が鷹觜神父を送り出しました。その中には、「八戸鮫町の教会で鷹觜神父様から幼児洗礼を受けました。子ども時代は、鷹觜神父様といつも一緒に楽しかったです」と話す東京から来られた兄妹もおられました。

通夜の時には、小松史朗神父が、葬儀ミサの時は會津隆司神父が、その思い出を話してくださいましたが、このお二人の話は、心にとても訴えるものでした。小松神父は、「塩釜教会で10歳の時、主任司祭として来られましたが、いつも嘘のない応対、接し方をしてくださいました。これは、私だけではなく、信者の全てに対してそうでした。鷹觜神父は親鳥が小鳥に自分がそしゃくして餌を



あげるように、神様のことを私たちに神様の素晴らしさを分かりやすく伝えてくださいました」と話し、會津神父は、「鷹觜神父はいつもイエスの心を指し示してくださいました神父でした。ですから私は、折に触れ、神父のところに出かけては、力をもらっていました。ローマに留学し、絵画をたしなみ、ミケランジェロの詩を訳し、グレゴリオ聖歌を指導する神父は近寄りがたいと思っていたのですが、全然そうではありませんでした。非常に人間的で、幼稚園の園長として心を碎いていた人でもあり、スペルマン病院の理事長として苦労した神父もありました。周りの人には推し量ることのできない十字架を担って歩かれた復活信仰を生き抜いた人だと思います」と分かち合ってくださいました。

鷹觜神父様は、今は神のもとに帰られ、友人の司祭たちや信者の多くに囲まれて、楽しく話し合っておられることでしょう。

Sr. 長谷川 昌子(教区広報委員)



ヘスス・アントニオ・バルデス・サンチェス 神父 帰天 (グアダルペ宣教会)

〈略歴〉

1932年 6月29日 メキシコ、トラスカラ市で誕生
1956年 7月15日 メキシコで司祭叙階
1958年 10月来日
1959年 2月～1966年 仙台教区会津若松地区福米沢田島教会主任司祭・田島幼稚園担当
1984年～2017年 京都教区で宣教司牧に携わる
2017年 メキシコ帰国
2023年 7月31日 メキシコ、ベラクルス市で帰天 91歳

仙台教区本部 教区長：ガクタン エドガル 司教 司教総代理：小野寺 洋一 教区事務局長：イグナシオ・マルティネス 太字：新任・転任			
地区	ブロック	小教区（）は巡回教会	担当司祭 ◎印は地区長（）は所属 ▷は居住地
第1地区	弘前	弘前、五所川原、黒石	小松 史朗（仙台教区） ▷弘前
	青森・下北	本町、（松丘）、浪打、大湊、野辺地	◎李 錫／イ ソク（韓国光州教区） ▷浪打
	三八	八戸塩町、鮫町、十和田、（五戸）、三沢、久慈	パトリック・カストロベルデ（淳心会） ▷八戸塩町 アンリ・バディバンガ（淳心会） ▷八戸塩町 板垣 勤 協力司祭（仙台教区） ▷十和田
第2地区	盛岡	四ツ家、盛岡上堂、志家	ポール・トー（ケベック外国宣教会） ▷四ツ家
	岩手中部	花巻、北上、水沢	◎マルコ・アントニオ・デ・ラ・ロサ（グアダルペ宣教会） ▷四ツ家 塩田 希 協力司祭（イエスの小さい兄弟会） ▷水沢
	岩手沿岸	遠野、宮古、釜石	堀江 節郎（イエズス会） ▷釜石
第3地区	岩手南部	一関、千厩、築館、（新生園）	渡辺 彰宏（仙台教区） ▷一関
	三陸	気仙沼、大船渡、米川	ロペス・ホセ・アウセンシオ（グアダルペ宣教会） ▷気仙沼
	宮城北部	古川、石巻	◎メヒア・タデオ・ラファエル（グアダルペ宣教会） ▷石巻
第4地区	仙台東部	塩釜、東仙台	森田 直樹（京都教区） ▷塩釜
	仙台西部	北仙台、西仙台	◎俞 鍾弼／ユ チョンピル（ドミニコ会） ▷北仙台
	仙台南部	一本杉、畠屋丁	ヴァレラ・ミゲル（グアダルペ宣教会） ▷元寺小路
	力テドラル	元寺小路、八木山	イグナシオ・マルティネス（グアダルペ宣教会） ▷元寺小路 ギャリー・ゲストベオ 協力司祭（淳心会） ▷司教館
	県南	亘理、角田、大河原、白石	小野寺 洋一（仙台教区） ▷白石
第5地区	中通り北	松木町、（桑折）、野田町、二本松	シャル・エメ・ボルデュック（ケベック外国宣教会） ▷野田町
	会津	会津若松、喜多方、南会津	會津 隆司（仙台教区） ▷会津若松
	中通り南	郡山、須賀川、白河	◎佐藤 修（仙台教区） ▷郡山
	浜通り	原町、いわき、（湯本）	幸田 和生 名誉司教（東京教区） ▷原町
※ギャリー・ゲストベオ司祭は仙台教区外国人司牧担当を兼任 ※高木健太郎神父は語学研修のため、1年間フィリピンに派遣 〈協力司祭〉佐々木 博、高橋 昌、佐藤 守也、首藤 正義、川崎 忠紀 ※新しい司祭の家担当 〈引退〉平賀 徹夫 名誉司教、土井 勝吾 〈療養〉氏家 和仁（郵便は教区事務所）			

編集後記

記録的な暑さが、日本列島をおそっておりますが、皆様方にはいかがお過ごしでしょうか？今回は予定していた記事が集まらず、かなり苦戦しました。でも、発行することができてホッとしております。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は隨時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

（上野 隆）

sendaiyoukuho@gmail.com 次号発行予定日：12月24日(日) 原稿締め切り：10月末日